シンポジウム

居場所と貧困と労働

働けないと生きてちゃいけないのかな

12月11日（日）、早稲田奉仕園キリスト教会館で、シンポジウム「居場所と貧困と労働～働けないと生きてちゃいけないのかな～」を開催した。主催は東京ＹＭＣＡオープンスペースliby（リビー）、後援は日本クリチャンアカデミー。日本郵便からは平成23年度年賀寄附金配分事業として助成をいただいた。参加者は74名と盛会で、３名のシンポジストからは「はたらく」をテーマにお話いただいた。

シンポジストの西野博之氏（ＮＰＯ法人フリースペースたまりば理事長）は、20年に渡る学校以外の居場所作りの関わりの中から仕事への取り組みを中心に話された。「お金をかけないで貧しく生きていく方向性を目指してもいいんじゃないか？」「政府の就労・自立支援などとは違った形で新しい生き方を探りたい」という発題や「存在をどこまでも肯定する」という暖かい想いを語られた。

中村あずさ氏（ＮＧＯ世界の医療団）からは、路上生活者との関わりからのお話を聴いた。次々に人が倒れて亡くなっていく路上で、炊き出しが生存確認の場になっている。昨日会った人にまた会えた時、「生きているだけでいい」という世紀の大発見をした！というお話が印象深い。

石川憲彦氏（児童精神科・小児科医）のお話には、自尊という言葉が出てきた。自尊は本来self-respect（セルフリスペ

↑写真右から、石川憲彦氏、中村あずさ氏、西野博之氏、司会の中島浩籌氏

キーワードは「貧しさの共有」

ニート・引きこもりなどが、今の仕組みは利用する人への仕組みを変えていく爆発的なエネルギーも必要だが、やはり私たちは、今の生き方を見直す必要がありそうだ。それには石川氏の話す「貧しさの共有」がキーワードになるように思う。大きな震災を受け厳しい現状が続いているが、だからこそ共に生き合う社会を作る機会だ。ＹＭＣＡには人と人がつながる力とネットワークがある。私たちから新しい生き方を発信していきたい。（liby　小倉哲）

復興支援　一歩一歩継続中

東日本大震災支援活動近況

■リフレッシュキャンプ

毎回好評を得て実施しているリフレッシュキャンプ（協賛：三菱商事㈱）は冬休み中、山中湖センターで３期（子ども対象１期、家族対象２期）と妙高高原ロッジで２期（子ども対象１期、家族対象１期）にわたり開催し、福島県の子どもやご家族計213名を招待しました。

妙高高原ではスキーや雪だるま作り、雪上大運動会など、立地を活かして雪を満喫しました。山中湖センターでは焚き火を作って焼きリンゴを食べたり、広いフィールドを走り回ったりした他、ワカサギ釣りやスケートなども楽しみました。このキャンプは、屋外での活動が制限されている福島の子どもたちのリフレッシュの場として、地元の新聞に掲載されるなどして広まっています。また、保護者にとっても良い情報交換の場となっているようです。

■キッズスカラーシップ

東京ＹＭＣＡのウインタープログラムに、被災地の子どもたちを招待する「キッズスカラーシップ」（協賛・三菱商事㈱）には、都内近郊で避難生活を送る子どもたちなど52名が、スキーキャンプやディキャンプに参加しました。東北の子どもたちにとってスキーは、毎冬の楽しみであることもあり、大変喜ばれました。

■復興支援活動クリスマス募金

12月16日の夕方５時～７時、会員と職員20名が東京駅前で街頭募金を行い、４万７８０８円が集められたほか、会員みなさまのご協力により、合計１５１万５、８２７円のご支援が寄せられました。感謝して、今後の支援に用いさせていただきます。

■ＹＭＣＡ歌の広場

12月20日、第２回ＹＭＣＡ歌の広場を石巻市の仮設グループホーム「あゆかわの郷」にて実施しました。今回は東京ＹＭＣＡ南センターで歌声サロンをはじめて10周年となる「ＹＭＣＡすずらん会」から、７名の皆さんにご協力いただき、20名のグループホームの方々と楽しいひと時を過ごすことができました。

（会員部　村上祐介）

石巻「ＹＭＣＡ歌の広場」に参加して

南センター会員　小川圭一

辛く厳しい震災体験を抱えている人々に、少しでも力になれることは何かと考えていましたが、童謡唱歌を歌うという形でボランティアに伺えたことは、有難いことでした。それは、ＹＭＣＡが継続的に支援活動を行っている地域であるため、後続のチームが居ることでリラックスした活動ができました。

音楽療法では、その時の気分に合わせた音楽を聴くのが良いとする“同質の原理”がありますが、「あゆかわの郷」の皆さんと、「鞠と殿様」や「浦島太郎」など物語歌で交流ができたという実感がありました。また、すずらん会でも好評の「肩たたき」のパフォーマンスで笑顔を見ることができたのもうれしいことでした。

これからは、東京以外にももうひとつの居場所としての石巻があることを感謝して、ワイズメンズクラブやすずらん会の皆さんと手をとりあい、ボランティアライフに励んで行きたいと思います。

＊その夜宿泊したJAL City仙台で、すずらん会の荒木さんがバーテンダーさんに歌の広場の話をしたところ、ジンジャーエール代を半額にしてくださいました！

「神の愛」の実践が「奉仕」になる

論考

ＹＭＣＡとキリスト教

『東京ＹＭＣＡの使命』（左記参照）には、「イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて」とあります。『日本ＹＭＣＡ基本原則』にも、ほぼ同文が掲げられています。ＹＭＣＡは教会ではありませんから、キリスト教を信じなさいとは書かれていませんが、キリスト教を基盤にしているわけです。しかし、それは一体どのようなことでしょうか。12月、職員のための研修で、上林順一郎牧師にお話いただきました。その一部をご紹介します。

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

上林順一郎（かんばやし　じゅんいちろう）牧師

日本キリスト教団松山教会牧師。『なろうとして、なれない時』（現代思想社）他著書多数。『ＹＭＣＡスタディシリーズ⑯　私たちの使命』も執筆されるなど、長年にわたり指導下さっている。

日本語の「愛」の語源は、「遭う、出会う」であり、出会った人とのつながりや絆から愛が生じると理解されています。その昔は「哀」という言葉の方が使われていました。「哀」は「衣」と「口」から作られた漢字で、「袖口をくわえてすすり泣く」姿を表しており、誰かをいとおしみ悲しむことを意味します。

一方、聖書における愛には、「エロース」「フィロス」「アガペー」の３種類があります。「エロース」は、今ではもっぱら性的な愛を意味する言葉として使われていますが、もともとは人間同士の愛を意味し、人類愛にまで高められていくような高尚な愛、同胞愛です。「フィロス」は、友愛、家族愛など、身近なものへの愛を意味します。

しかし聖書の中でもっとも強調されているのは「アガペー」です。「アガペー」は、神の愛、イエス・キリストの愛で、報いを求めない愛であり、自己犠牲の愛、敵をも愛する愛です。すべての人が神の愛の対象であり、等しく公平で公正です。

東京駅の丸の内口を出た所に「青年の像」という銅像があります。青年が両手を広げて天を仰ぐ姿の銅像ですが、その土台に「アガペー」とギリシャ語で書かれています。これは戦後、クリスチャン有志の主唱により造られたものです。戦争直後は、家を失った人、家族を失った人がたくさんいました。衣食住が決定的に欠乏しており、衣食住が皆の最大の希望でした。しかしその時代に、日本に本当に必要なものは愛であるとしてこの像は造られました。衣食住は確かに必要ですが、希望や愛を失った社会の中で、人が求めなければならない姿を現すものとして作られたのです。

最近、家族の中での殺傷事件が頻繁に起きるようになりました。親が子を、子が親を、夫が妻を、妻が夫を傷つけ、子を虐待する。こうしたものの背景に何があるかというと、根本的には愛が失われているといえるでしょう。３つの愛、とりわけアガペーの愛が失われているのです。

キリスト教の精神は愛です。エロースやフィロスの愛は、自分が気に入った人を愛すること、仲間や親しい人、役に立つ人を愛するものですが、アガペーは、憎むべき敵をも愛する、自分にとって損になる人をも愛することです。

たとえて言えば、聖書の「良きサマリヤ人」の話です。このサマリヤ人は強盗にあって半殺しにされているユダヤ人を見つけ、哀れに思い、敵対関係にあったにもかかわらず、自分のロバに乗せて宿屋へ連れて行き介抱しました。敵を愛することは、普通はできないことですが、彼はそれを行ったのです。それがアガペーの愛です。

先日、「大地の詩（うた）」という映画を見ました。主人公の留岡幸助（とめおかこうすけ　1864-1934）という牧師は、北海道の監獄所の教誨師（きょうかいし）でした。その当時、囚人は牛や馬のような扱いを受け、虐待されていました。しかし留岡は、彼らが罪を犯さないようにするためには、何よりも家庭が大切であると考え、「家庭学校」を作りました。これは、現在の児童養護施設の先駆であり、児童福祉の出発点になりました。

東京駅丸の内口にある「青年の像」。戦後直後に作られたこの像の土台には「愛」の文字が刻まれている。

「奉仕」という言葉は、現在は、困っている人を助けるといった意味で使われていますが、漢字の「奉」はもともと、たてまつること、神に物を奉げること、神に仕えることを意味します。英語ではｓｅｒｖｉｃｅであり、礼拝を意味します。神へのサービスです。ギリシャ語では「ディアコニア」と言います。これは食卓の準備をする、給仕をするということも意味します。共に食事をするということは、普通はできないことですが、彼はそれを行ったのです。それがアガペーの愛です。

先ほどの留岡幸助は、収監所にいたとき、囚人と一緒に食事をしました。「神は愛なり」と説教をしただけでは現実に愛はおこりません。単なる名詞の愛であれば、１００回だって言うことはできますが、何も伝わりません。そこで留岡は、説教をした後、普通は面会すら許されない重大犯罪者を家に招き、食事をしました。同じ仲間として一緒に食事をするということは、人間として共に生きるということです。

ＹＭＣＡの基本原則では「愛と奉仕」と並列に並んでいますが、これは別々のことではありません。名詞の「愛」でなく、動詞の「愛する」は、自分を放棄して他者のために生きることです。名詞として理解する愛は単なる知識であり、頭の中での理解にすぎませんが、「奉仕」という形で愛が実現していく、実践されていくわけです。

ＹＭＣＡの活動は、神と人への奉仕です。人への奉仕は、すなわち神へ奉仕していることですから、謙遜でなければなりません。神を礼拝し、人に奉仕し、共に生きていくこと。イエスの生き方が表現され、実行されていくこと。それがＹＭＣＡのミッションです。それでなければ、他の団体と変わらないことになります。

だからといって、たとえばＹＭＣＡがやるサッカーが、何か特別なサッカーであるわけではありません。やっていることが他の団体と同じであったとしても、活動の中で、イエス・キリストの生き方があらわそうという思いを持つか持たないかで、大きく違ってきます。どのような活動をする場合でも、活動の基盤を理解し、その思いが参加者に伝わっていくようでなければなりません。何を実現しようとしているか、何に根ざしているかが見えなければ、ＹＭＣＡはその意味を失ってしまいます。

「イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の精神に基づいて」という使命こそが、他にはないＹＭＣＡの独自性なのです。

（編集　広報室）